

マラハン農協活動報告

2009 年 7 月 27 日(月)1:30 ~ 15:30

天気 晴れのち曇り

場所 マラハン（マラハン農協共有地、バス停留所近辺）

参加者 10 名（オベンザ先生、マラハン農協組合員 5 名、CASEDO 1 名）

午後 0 時 10 分にマラハンに到着。バスを降りると、もう 1 台のバスが停車中（写真 1）で、乗客乗務員は、トイレ（写真 2）休憩や、昼食休憩に道路沿いの食堂（写真 3、4）に入っていた。ここマラハンには、長距離バスのサービスエリアとしての機能がある。乗客目当てに、水、果物、スナックを売る人の姿も見られる。現時点で、交通量や物産の販売高は不明。本日は私もここで昼食をとった。



写真 1 マラハンには長距離バスが停車する。



写真 2 マラハンのトイレ。公共ではなく私有。



写真 3 食堂内の様子 1 25 人程度収容可能。



写真 4 食堂内の様子 2 写真 3 を別の角度から。

1 時 15 分に増築中のヤギ小屋に到着。静かで人の声がしない。5 名の農協メンバーは、昼休み中であつた。1 時 30 分から作業再開。写真 5 は、午後 1 時 30 分の状態である。2 名は、小屋の中で、新旧の小屋の行き来を可能にするドアを作成（写真 6）。2 名は、外で竹を削ぐ作業（写真 7）。女性 1 名は、しばらく姿を消していたが、米袋いっぱいの草を運んで戻ってきた。ヤギの餌とするのである（写真 8）。なお、餌は、メンバー 7 人が曜日毎に担当を決めて与えている。



写真5 ヤギ小屋。1時30分の状態。



写真6 ヤギ用のドアの作成。



写真7 竹を削ぐ。



写真8 ヤギの餌。食べ易いように、適当な長さに切る。

ヤギが、小屋に向かってきた（写真9）。メンバーの一人が、ヤギを追い立てたのである。ヤギも列をなして戻ってきたし、この追い立てる技能には感心した。写真10、11は餌を食べるヤギの様子である。2時20分頃、小休止となりパンが配られた（写真12）。



写真 9 羊飼いのように、ヤギを追い小屋の中に 写真 10 餌にありつくヤギ
追い込むメンバー。



写真 1 1 餌を食べるヤギ。小屋の中から撮影。 写真 1 2 小休止。おやつにはパンが配られた。

休憩後、新旧の小屋の隙間を塞ぐ作業（写真 1 3）、同じく新旧の小屋の通り道とドアを設置する作業（写真 1 4）、屋根の軒の長さを揃える作業（写真 1 5）などが行われた。オベンザ先生とメンバーが話し合い、出産するヤギと生まれた子供を、他のヤギから分ける柵が新しい小屋に作られることになった。その作業の途中（写真 1 6）、3 時 30 分に終了・解散となった。全体的に、建設はほぼ完了しており、残る作業は、この柵と屋根の設置のみである。



写真 1 3 新旧の小屋の隙間を塞ぐ作業。



写真 1 4 新旧のヤギ小屋をつなぐ通り道。



写真 1 5 軒の長さを統一する。



写真 1 6 ドアに取り付けと、出産に備えた囲いの設置（途中）。3 時 30 分現在。

ヤギ小屋の近くのプロテクション・ハウス（ビニル・ハウス、温室）を通りかかると、CASEDO スタッフ 3 名が、暴風でダメージを受けたイチゴの苗を修復していた（写真 1 7）。ハウスの中は、主にレタスの栽培に使用されている（写真 1 8）。帰り道、農協メンバーと山中を歩く。先頭に行く人の背景には人工林があることがお分かり頂けると思う（写真 1 9）。これは、オベンザ先生の指導のもと、CASEDO、農協メンバー、地元住民、また日系人会関係者や MKD 学生等による植林活動により再生した森林である。熱帯林は一度伐採され地表面が露わになると、強烈な太陽光や豪雨のため、再生不可能な“砂漠”になりやすく、このような再生事例は比較的珍しい。

なお、マラハンで養蜂を始めることを、オベンザ氏、その他農協メンバーや CASEDO スタッフに知らせた。オベンザ氏の意見は、マラハン地区は標高も高く、7 月～12 月まで風が強い。よって、ミツバチの生育に適するかどうか・・・。話は、つい先日、暴風で車の屋根が飛ばされ、無くなったこと（写真 2 0）に移った。今後、スケジュールを調整し、養蜂セミナーをパナボ市のミンダナオ養蜂農家組合長の自宅で受ける予定。



写真 1 7 ハウス内では、イチゴ苗が暴風雨で台無しにされた。



写真 1 8 ハウス内の様子。手前はレタス。



写真 1 9 帰り道。以前は、禿山だったが、植林活動によって、森が再生した。このような事例は比較的珍しい。



写真 2 0 オベンザ氏の車は暴風で屋根を吹き飛ばされた。

マラハン農協の方から、家に招待された。幹線道路沿いで農業を営む傍ら、野菜の販売所兼雑貨店も経営しておられた。写真 2 1 は、その庭先のカボチャの苗育成の様子。種は CASEDO から配られたものである。苗は、バナナの葉で作った容器に入れられていた（写真 2 2）。イチゴ苗も育てておられたが、これはカップ麺の容器に植えられていた（写真 2 3）。隣では、男性が、ダバオの中心部まで売りに行くカボチャを用意していた。ジープニーによる、カボチャの運搬費は一袋 60 ペソ、成人 1 名の交通費は P50 ペソとのこと。カボチャは、中心部で 12 ペソ/kg で売る。マラハンで八百屋に売るなら 7 ペソ/kg という。カボチャの重量を 50kg と仮定すれば、手取りが 600 ペソ、交通費、運送費を引けば、440 ペソが手元に残る計算になる。マラハンで売れば、350 ペソなので、市内で売るほうが有利である。



写真 2 1 メンバーの方の庭園。カボチャの苗が育てられていた。



写真 2 2 写真 2 1 の拡大。バナナの葉が苗の入れ物に使われている。



写真 2 3 イチゴの苗。入れ物はカップ麺の器。



写真 2 4 カボチャを市内の中心部まで売りに行く男性。

幹線道路の東側の家々は、斜面にあり、地面からはかなりの高さにある（写真 2 5、2 6）。野菜の販売所を 2 軒回って、野菜の名称と小売価格の聞き取りを行った。あまり、価格ばかりをしつこく聞いて回るのも何なので、買取価格等、その他の情報は次回以降に聞き取ることにしたい。次回には、ヤギ小屋が完成の見込みである。その後、プロテクションハウスの建設再開、ヤギの出産、養蜂セミナー受講のイベントが控えている。



写真 2 5 清水寺の舞台を想起させる作り。



写真 2 6 同じく清水寺を想起させる作り。

以上

報告：太田勝久